

第二十三回

張遼ちやうりやう威を逍遙しやうりやうに震ふるう、甘寧かんねい百騎もて魏の營を劫おびやかす

— 濡須口の戦い（張遼・甘寧・周泰の奮戦） —

（前回から今回まで）

曹操が漢中を攻略している隙すきをつき、孫権は十万の大軍を率いて、曹操の対吳戦線の重要基地である合肥がっぴに攻め寄せます。そのとき合肥には、曹操が信任する張遼ちやうりやう・楽進がくしん・李典りてんの三人の将軍が駐屯していましたが、いかんせん三人の仲はよくありませんでした。

そこに曹操から、孫権が攻め寄せたら開け、と書かれた軍令が届きます。

張遼は軍令を開けると、「張遼・李典は城を出て戦い、楽進は城を守れ」と書かれています。これを見た張遼は、寄せてくる大軍にも臆おくせず、軍令通りすぐに打つてよいといひます。しかし、李典は張遼に反発はんぱつして黙つたまま答えようとしません。また、楽進も、孫権の大軍を相手に打つてでるよりも、守りを固めた方がいいと言ひます。

しかし張遼は、「自分はこれから死にも狂いで決戦するぞ。何をためらっているのだ」と言ひ放ち、八百人の勇士を募つて出撃しようとしひます。それに心を動かされた李典しえんは、私怨を捨てて軍令に従うから指示をしてくれ、と申し出ひます。張遼は大喜びで、李典とともに出

撃します。

そのとき、緒戦しよせんの勝利に気をよくした孫権が、大軍を急がせながらやって来ます。そこへ、張遼がわずか八百人の軍勢で一気に突入します。予期せぬ反撃に仰天した孫権は、どうしてよいかわからずに逃げまどい、やつとのことで迎への船に乗り込みます（『三国志』では、孫権は小高い丘の上に逃げています）。

この後の張遼の奮戦ぶりは凄まじいもので、『三国志演義』よりも『三国志』の方が迫力がありますので、以下、それで補足ほそくします。

丘の上に逃れた孫権は、やがて張遼の軍勢が少ないことに気づき、兵を集めて張遼を幾重いくえにも取り囲みますが、張遼は奮戦して、数十人の部下とともに囲みを突破して脱出します。取り残された兵の「將軍、私たちを見捨てるのですか」との叫び声を聞くと、張遼はためらうことなく取って返し、彼らを無事救い出します。呉の兵は、張遼の凄まじさすさにたじろぎ、誰も立ち向かおうとしません。明け方から戦って真昼になると、呉軍は戦意を失ったので、張遼は引き返して守備を固めます。孫権は十日余り合肥を包囲しますが、城を落とせないまま退いていきます。

孫権があきらめて退却を始めると、張遼はまたしても追撃をかけます。そのとき孫権は後

軍にいましたが、馬上でみずから弓矢で応戦します。味方が必死に防戦する間に、孫権は逍遙津（川の渡し場）まで来ましたが、橋の板が撤去されていたので、孫権の側近の者が、孫権の馬に鞭を当てる勢いづかせ、橋を飛び越して逃れることができました。

張遼は、呉軍の後軍にいて弓矢で応戦した人物を目にとめていて、あとで呉軍の降伏兵に「あの紫の髻の將軍は何者だ」と聞いて、はじめてそれが孫権だったとわかります。そして、「あれが孫権と知っていれば急追して捕まえたんだが」と言つてくやしがりました。

以上、『三国志』呉主伝と張遼伝の内容です。

『三国志演義』はつづいて、次のように書きます。

「この戦いは、江南の人々を震えあがらせ、張遼の名前を聞いただけで、子供でさえ夜泣きをやめるほどだった」と。張遼は、文字通り「泣く子も黙る」猛将でした。

このとき、漢中から引上げてきた曹操が、合肥に救援にやってきました。

合肥は魏と呉の争奪の地としてしばしば登場します。合肥は巢湖に臨み、水路を通じて長江につながっていて、海に出ることもできる要衝の地でした。数回に及ぶ合肥の戦い、濡須口の戦いが起こっています。

(本文抄)

突然、曹操が漢中から四十万の大軍を率い、合肥の救援にやって来たとは知らせが入った。孫権は配下の部将たちにはたずねた。

「曹操は遠方からやって来たばかりだ。先頭に立って敵を打ち破り、その鋭気を挫く者はいないか」

凌統が進み出て言った。

「私に行かせてください」

「どのくらいの軍勢を連れて行くのか」と孫権。

「三千人で十分です」と凌統。

と、甘寧が「百騎あれば敵を撃破できます。三千人もいりません」と言ったので、凌統は激怒し、二人は孫権の前で言い争いを始めた。

(※補足説明)

甘寧は、劉表配下の江夏太守黄祖に身を寄せていたことがありました。そのとき、甘寧は、黄祖を攻撃してきた孫権軍の凌統を射殺しています。凌統は凌統の父です。ですから、甘寧は凌統にとって父の仇なのです。甘寧は、その後、黄祖のもとを離れて孫権に仕えますが、

凌統との間には常に険悪な空気が流れ、互いに刀をとってあわや切り結ぶ、という場面もありました。凌統が先に曹操軍の張遼と戦いますが、勝負がつかず陣営にもどってきます。

甘寧は凌統が帰還したのを見ると、ただちに孫権に申し出た。

「私は今夜、ただ百騎を引き連れ、曹操の陣営に夜討ちをかけます。もし兵士一人、馬一頭でも失ったなら、手柄とはみなしません」

孫権はその意気を壮とし、精銳の騎兵百人を選んで甘寧に与え、また兵士たちに五十瓶の酒と五十斤の羊肉を下賜した。

甘寧は自陣にもどり、百人全員を座に着かせると、まず銀の碗わんに酒を酌み、みずから二杯飲んでから、一同に告げた。

「今夜、主命を奉じ敵陣に夜討ちをかける。諸君はそれぞれ存分に飲み、力をふるって前進してもらいたい」

一同はこれを聞くと、たがいに顔を見合わせた。彼らの気乗りのしないようすを見た甘寧は、抜き身の剣を手に持ち、腹を立てて叱りつけた。

「上将たる私でさえ命を惜しまないのだ。おまえたちは命が惜しいのか」

一同は甘寧が顔色を変えたのを見ると、いっせいに立ち上がった。言った。

「死力を尽くす覚悟です」

甘寧は酒と羊肉を百人に分け与え、ともに飲んだ。

二更にじよう（午後九時から午後十一時の間）になるころ、甘寧は白い鷺鳥がぢようの羽百本はねを持って来させ、これを目印として、兵士たちのかぶとにそれぞれ挟ませた。

全員、鎧に身を固めて馬に乗り、曹操の陣營の側までやって来ると、逆茂木さかもぎ（先の尖った木や竹を立て、敵の侵入を防ぐもの）を抜き取り、鬨とぎの声をあげながら、陣營に突入して、まっしぐらに中軍に突っ込み曹操を討ちとろうとした。

曹操の本陣はずらりと車両を並べ、まるで鉄の桶おけに囲まれているようになっていて、突入することはできなかつた。

やむなく甘寧がわずか百騎を率いて、右に左に突撃をかけたため、曹操軍は仰天して浮足だち、敵兵の数もつかめないまま、大混乱に陥った。甘寧の百騎は敵の陣營を縦横無尽じゆうおうむじんにかき回し、手あたり次第なぎ倒せば、曹操の各陣營から太鼓がとどろき、松明たいまつが星のように輝き、地をどよもす鬨の声があがるなか、甘寧は南門から斬ってでたが、行く手をさえぎろうとする者はなかつた。孫権は周泰しゅうたいに軍勢を率いて加勢させ、甘寧は百騎を率いて濡須に帰り

着いた。曹操軍は伏兵を恐れ、追撃をかけようとしなかった。

甘寧は百騎を率いて陣に帰還したが、兵士一人、馬一頭失つていなかった。陣營の門に到着したとき、甘寧は百人の騎兵に太鼓を打たせ笛を吹かせて、口々に「万歳」を唱えさせ、歓声は天地を震わせた。孫権みずから出迎えると、甘寧は馬を下り平伏した。孫権は諸将に言った。

「孟徳もうとくには張遼がいるが、私には甘興霸かんこうは（甘寧の字）がいる。相手に取つて不足はない」

（解説）

甘寧は精銳百人を選抜し、曹操の本陣に夜襲をかけます。出陣の前にも酒を飲み、皆を叱咤しつたげ激励しげします。夜襲は成功し、曹操の本陣を大混乱に陥れます。そして、甘寧は意気揚々いきようようと帰還してきます。しかも、兵士一人、馬一頭も失つていませんでした。孫権は、「曹操には張遼がいるが、私には甘寧がいる」と大喜びしました。

前に、孫権は、張遼に捕まる寸前まで追いつめられましたが、甘寧は孫権のために見事に意趣返しいしゆがえをしたのです。こうなると、凌統も黙っていられません。

(本文抄)

翌日、張遼が軍勢を率いて戦いを挑んで来た。凌統は甘寧が手柄を立てたため、奮ふるいたつて言った。

「どうか私に張遼と戦わせてください」

孫権は許可した。かくして凌統は五千の軍勢を率いて濡須をあとにし、孫権はみずから甘寧を連れて、戦いぶりを見ようと出陣した。

双方が対陣するや、張遼が左に李典りてん、右に楽進がくしんをしたがえて出てきた。凌統が馬を飛ばし刀をひっさげて乗り出すと、張遼は楽進に迎え撃たせた。二将（楽進と凌統）は戦いを交えること五十合、なおも勝負がつかない。

これを聞いた曹操がみずから馬に鞭うち、門旗の下まで来ると、二将が激しく戦う様子を見て、曹休そうきゅうにひそかに矢を射よと命じた。

曹休が張遼の背後に身を隠し、弓を引きしぼって一本の矢を放ったところ、凌統の乗っている馬に命中した。馬がうしろ足で直立し凌統を地面にふりおとした瞬間、楽進は急いで鎗で突き刺そうとした。鎗がまだとどかないうちに、弓の弦のうなる音がしたかと思うと、一本の矢が楽進の額に命中し、楽進はもんどり打って落馬した。そこで両軍はいっせいに押し

だして、それぞれ凌統と楽進を救い出して自陣にもどり、銅鑼どらを鳴らして戦いをやめた。

凌統は帰陣するや、孫権に感謝して礼を述べると、

「あの矢を射たのは、甘寧だぞ」と孫権。

凌統は地面に頭を打ちつけ、甘寧に感謝して言った。

「貴殿から、このような恩愛をいただくとは、思いもありませんでした」

これ以後、凌統は甘寧と生死を共にする契りを結び、二度と憎しみを持たなくなつた。

(解説)

凌統の危機を救つた一本の矢。なんとそれは、親の仇かたきである甘寧が放つた矢でした。かつて両者は切り結んでやり合おうとする場面もありましたが、帰陣して孫権からそのことを知らされた凌統は、地面に頭を打ちつけて甘寧に感謝しました。以後、二人は生死を共にする契りを結びます。

しかし、『三国志』甘寧伝や凌統伝には、そのような記述はありません。そればかりか、孫権は二人を会わせないようにするため、甘寧を別の地に駐屯するように命じています。孫権のとりなしはあつても、やはり父の仇かたきである甘寧への恨みは深く、そう簡単には許せなか

ったのでしよう。

さて、このあと曹操は総力をあげて濡須に攻め寄せます。このときの戦いで、孫策以来の宿将である陳武や董襲が戦死します。

陳武は曹操軍の龐徳と闘い、服が枝に引つ掛かり動きが取れなくなつたところを斬られしまいます。また董襲は、暴風のために転覆しそうになつた船を守つて溺死します。

孫権は、陳武と董襲の遺骸を探し出して丁重に葬ります。また同じく孫策以来の宿将周泰は、自ら重傷を負いながらも孫権を窮地から助け出します。

(本文抄)

周泰は乱軍のなかを突破して、長江の岸边にたどり着いたが、孫権の姿が見えないので、馬首を返して、ばしゅ とも敵陣に突入し、味方の兵士にたずねた。

「殿はどこだ」

兵士は兵馬が群がっているあたりを指さしながら、言った。

「殿はあそこで囲まれておられます」

周泰は囲みに突っ込み、孫権を探し当てると、「殿、私のあとについて来てください」と

言った。

そこで、周泰が前、孫権が後になり、力をふるって敵にぶつかった。周泰が長江の岸辺まで来て、ふりかえるとまた孫権の姿がない。ふたたびとって返して包圍網ほういもうのなかに突っ込み、ふたたび孫権を探しあてた。

と、孫権が言うには、「矢石を射かけられて出られない。どうすればよいか」

「殿は前、私が後になれば、囲みを破って出られます」

そこで孫権は馬を飛ばして先に進んだ。周泰は右に左にと孫権を護まもるうち、体にいくつもの鎗傷やりきずを負い、矢で厚手の鎧よろいを射抜かれながら、孫権を助け出した。

岸辺まで来たとき、呂蒙が一手の水軍を率いて救援に現れ、孫権と周泰を船に乗せた。

孫権は言った。

「私は周泰が三度も突っ込んで来てくれたおかげで、十重二十重とえはたえの囲みを脱出することができた。だが、徐盛じよせいはまだ取り囲まれている。救い出せないか」

周泰は「私がもう一度助けに行つて来ます」と言うや、鎗やりをふりまわしながら、またも身をひるがえして、十重二十重の包圍網のなかに突っ込み、徐盛を助け出した。

二将（周泰と徐盛）はどちらも重傷を負っており、呂蒙は兵士に命じて陸上の敵兵めがけ

て矢を乱射させ、二将を助けて船に乗せたのだった。

孫権は陳武ちんぶが討ち死にし、董襲とうしゅうもまた長江に沈んで死んだことを知ると、はげしく悲嘆にくれ、水中から董襲の亡骸なきがらを捜しださせ、陳武の亡骸といっしょに手厚く葬った。

また、周泰が自分を救出し守護してくれた功績に感動し、宴会を催してねんごろにもてなした。孫権はみずから盃を捧げ、周泰の背中を軽く叩きながら、流れ落ちる涙で顔を濡らしながら言った。

「卿けいは命を惜しむことなく、身に数十か所も鎗傷を負い、肌はだは切り刻まれたようになりながら、二度も私を助けてくれた。卿は血を分けた肉親同然であり、兵馬を指揮する大任たいにんをゆだねたいと思う。卿こそ私の第一の功臣だ。これよりは、栄華も苦勞も、卿とともにしたいものだ」

言いおわると、周泰に衣を脱がせ、諸将に見せた。その皮膚は刀でえぐったように、全身傷痕きずあとだらけだった。孫権がその傷痕を指さしながら、一つ一つ由来をたずねると、周泰は戦闘せんとうで負傷したときのようすを事細ことこまかに説明した。

孫権は、周泰が一つの傷痕の説明をするたびに、大きな盃で酒を飲ませたので、この日、周泰は大いに酔った。孫権は青い薄絹の蓋かさを賜り、周泰が出入りするたびに、その蓋を張ら

せて、功績を顕彰したのだった。

(解説)

孫権が周泰の奮戦によって救われたのは、これが二度目です。一度は、若き日の孫権を、山賊の攻撃から身を挺して守っています。

上の本文のもとになったのは、『三国志』周泰伝の次の記述です。

「この当時、朱然や徐盛たちはみな彼（周泰）の指揮下に入っていたのであるが、誰も彼の指示に従おうとはしなかった。孫権はそのためわざわざ濡須の塢まで閲兵に出かけ、そこで部将たちを集めると、盛大な宴会を開いた。孫権はみずから酒の酌をしてまわり、周泰の前まで来ると、周泰に命じて上衣を脱がせ、孫権はその傷あとを指さしながら、どのようにしてその傷を受けたのかと尋ね、周泰は、ひとつひとつ昔の戦いを思い起こしつつ、答えた。

それが終わると、上衣を着なおさせ、宴は終夜つづいた。その次の日、使者を遣わして周泰に御蓋を授けた。このことがあってから、徐盛たちは周泰の指揮に従うようになった」（『三国志』呉書Ⅱ、小南一郎訳、筑摩書房）。

周泰は「寒門（身分の低い家柄）」の出自のため、司令官になってもどこか遠慮するとこ

ろがあつたのです。その彼に、遠慮することなく思い通り事を運べと励まします（『三国志』周泰伝の注「江表伝」）。

ちようやく 趙翼は『二十二史劄記』で、「孫氏兄弟（孫策と孫権）は意気を以て相い投ず」と評していますが、一人また一人と光をあてながら、その人物の力を引き出すために周到しゆうとうな心配りをしていたことがうかがえます。

こうして、曹操と孫権は一か月余り対戦しますが、結局、どちらも勝利を収めることができませんでした。そこで、孫権は曹操に毎年貢みつぎ物を納めることを条件に、和平を申し出ます。曹操もこれに同意し、曹操と孫権はどちらも帰還きかんしていきます。